

## 平成24年度 第2回さいたま市文化芸術都市創造審議会会議録

- 1 日 時 平成25年1月17日（木）午前10時から午後12時10分
- 2 会 場 さいたま市役所 議会棟2階 第5委員会室
- 3 出席者
  - (1) 委員（8名）  
青木康高、安島大輔、稲田浩、加藤種男、島頼子、中村みよ子、畑野祐一、服部圓  
（以上8名）
  - (2) 事務局（7名）

市民・スポーツ文化局	石井理事
スポーツ文化部	野間部長
文化振興課	中村課長、織田課長補佐、横溝主任
株式会社丹青研究所	大木
- 4 公開・非公開の別 公 開
- 5 傍聴人の数 3名
- 6 内 容
  - (1) 開会
  - (2) 挨拶
  - (3) 報告
    - ・アンケート調査結果について
  - (4) 議事
    - ・さいたま市文化芸術都市創造計画骨子（案）について
  - (5) その他（事務局からの報告）
    - ・さいたま市議会市民生活委員会において、現在、都市創造における文化芸術政策の重要性というテーマで調査研究を行っている。文化庁への視察、浜松市や越後妻有アートトリエンナーレの視察、研究者や団体への調査を行い、この2月に開催される市議会市民生活委員会において、文化芸術都市を創造するための提言が報告される予定。本計画にその提言を反映させていきたい。
    - ・今後の進め方としては、本日の意見を踏まえ骨子を作成し、その骨子に対して、意見交換会や庁内検討委員会での意見を反映し、素案を作成していきたい。次の会議は3月を予定しており、素案についてご検討をいただく予定。
  - (6) 閉会

## 議事録

<報告 アンケート調査結果について>

加藤会長     それでは、次第3報告アンケート調査結果について、事務局からご説明をお願いします。

事務局     資料1「市民意識調査及びアンケート調査結果の分析」の説明

加藤会長     アンケート結果について、ご質問、ご意見がありましたらどうぞ。

安島委員     B. 文化芸術活動団体調査で、回収された246サンプルとありますが、回収率は何%ですか。

事務局     こちらは、ある一定期間において調査を実施しておりますので、その期間内において246サンプル回収したということです。全体の配布数は、把握しておりません。

加藤会長     団体に配布されたということであれば、246は結構多いのではないですか。

安島委員     7月下旬から8月上旬までの2週間位で、文化協会加盟団体及び該当施設を利用した人すべてに配布したということですか。

事務局     対象の文化施設をご利用された文化芸術関連団体の方にアンケートの依頼をして回答していただいたということです。全ての方というよりも、ご協力いただいた方ということになるかと思えます。

加藤会長     私は、割合と興味深いデータが出ているのかなと理解しました。イメージが低いということはかんばしくないですけど、現実にはこうなのだとことです。「文化的なまち」ということでは、ここにお住まいの方も、そうでない方も、どちらから見ても低い、あまり特色が見られないということではないかと思えます。

それから、日常的に文化芸術活動を行っておられる方もごく一部で、何らかの形で参加される場合も、鑑賞など受動的な活動が多い。

本日おいでいただいている委員の先生方は、どちらかという自ら活動される方が多くいらっしゃるの、そういう意味では、市全体で見るとそういう方が比較的少ないというデータだと思います。それから、31歳以下に全般的に参加が少ないというのも少し気になる点です。しかし、盆栽、鉄道、音楽といった資源についての鑑賞はあるので、そうしたものを活かせば、このイメージを変えることができるかもしれない。そういう意味で、どこに重点を持っていくとイメージを変えられるかということだと思います。

我々が、「文化的なまち」というイメージが高くない状況に対して、何をしていくと良いのだろうかということをご提案できれば、このイメージを変えることができる。それが大きな目標だろうと思えます。そういう意味では、変えるためにどういったことがあったらいいかというご提案をいただくことになるかと思えます。

ほかに特にご意見がなければ、また後程でも質問がありましたら、また改めてということで、次第4の議事に入らせていただきます。

<議事 さいたま市文化芸術都市創造計画骨子（案）について>

加藤会長 さいたま市文化芸術都市創造計画骨子（案）について、事務局からご説明をお願いします。

事務局 資料2「さいたま市文化芸術都市創造計画骨子（案）」の説明

加藤会長 今、事務局から、計画骨子（案）の前半部分についてご説明をいただきました。9ページの数値目標の部分までですが、議論していきたいと思います。文化芸術の現状と課題、目標に対して、ご意見なりご質問をお伺いします。よろしくお願いいたします。

安島委員 質問です。年間来訪者数が、平成22年度が2,130万人ということでしたが、その前はどのくらいですか。横ばいなのか、減っているのか、増えているのか。

事務局 数字を確認します。

加藤会長 では、それについては調べていただきます。

稲田委員 今、大卒で伺っていると、私が感じているものとパーセントがだいぶ違います。私は、長らく旧浦和に住んでいました。今は4市が合併したから一律に「さいたま市」と捉えるという考え方で進んでいる感じがしますが、政令指定都市になって一つになったが、実際の行動は、相当、昔のままを引きずっているのではないかと見えています。

ですから、旧浦和、旧大宮、旧岩槻、旧与野、これをある程度細かく分析して、それがどう推移しているかを見ていかないと、ただひとまとめに全体について言われても、私が考えているものとパーセントが全然違うと感じます。その点については、今後、いかがいたしますか。

加藤会長 市としてのお考えはどうですか。

事務局 データとしては持っていないのですが、考え方としては、合併してまだ10年ということもあり、確かに、地域ごとに特色があると思っております。ただ、底上げ、向上という意味合いからすれば、やはりさいたま市全体で見ていくべきと考えております。今までの経緯は確かにあると思っておりますが、現状では、さいたま市としての数字です。私どもは、やはりこれを底上げするべきであると考えております。

加藤会長 稲田委員のご質問の趣旨は、例えば1の「文化芸術活動への参加率」という意味で言うと、旧浦和市はもっと数字が高かったのではないかと印象を持っておられるのではないかと推測します。この数字の10%も、旧浦和地区で言えば十分達成できているのではないかとということでしょうね。

稲田委員 そうですね。

加藤会長 そういうことも含めて、区のそれぞれの行政もあるでしょうから、それぞれの区で、ある程度の目標を再度これに基づいて建て直すということもあり得るかと思えますし、既に区によってはこれをはるかに超えている区があることも当然だと思

ます。その良いところは別に減らすことはないので、維持していただいて、まだ目標とだいぶ距離がある区はできるだけその目標に近づけていただくということで全体の底上げを図りたいというのがこの数値の趣旨だと思うので、そのようにご理解いただくといいのかなと思います。

畑野委員 9ページに「文化芸術活動への参加率の向上」とありますが、この文化芸術活動への参加というのは、例えばコンサートを聞きに行くという受動的なことと、自分が何かをするという能動的なことをあわせた数字でしょうか。

事務局 そうです。設定の意図としては、自主的に活動している方々の活性化は当然必要ですが、鑑賞する側の理解と関心も促進していきたいと考えております。文化芸術に関する意見交換会の中で、良質なオーディエンスの育成をしていくべきであるという意見もありましたので、行う人、鑑賞する人、両方の底上げをしていく施策を考えていくという計画になります。

島委員 例えば、コンサートを聞きに行くといっても、クラシックから韓流スターのコンサートまで、対象はものすごく広くあります。そういうものも含まれるのかどうかわかりませんが、若い人を参加させるには、やはり韓流スターとかそういうことになるのかなと思います。これから高齢化が進んで、リタイヤする人も多くなりますから、比較的年齢が高い人が自分で色々な活動する数字は上がると思います。放っておいても上がるのではないかと思いますけれども、若い人を参加させるということは、皆さん、自分の生活もあって、文化活動まで引っ張り込むのはなかなか難しいと思います。

あと、「文化芸術の創造性を生かしたまちづくり」と2ページにありますけれども、「まちづくり」のイメージは、私たちなどは、箱ものとか、道路をよくするとか、そういうイメージになってしまうのですが、そういう都市としての魅力の向上は具体的にどういうことを考えていらっしゃるのでしょうか。

事務局 文化芸術都市創造条例にもありますが、経済や教育、都市計画などのまちづくり、こうしたさまざまな分野において文化芸術が持つ創造性を加味したまちづくりをしていくということであり、例えば、橋をつくる時に芸術性を加味するとか、公園に芸術作品を置いていくなどのことが考えられるかと思います。

畑野委員 まず質問なのですが、平成18年にできた、前の文化芸術振興計画の5つの柱の一つにスポーツ文化があります。計画を見直す中で、例えばサッカーの試合を埼玉スタジアムで見るということもカウントされるのでしょうか。

事務局 スポーツは切り離しています。スポーツについては、文化芸術振興計画には入っていますが、別途、スポーツの計画を策定しており、本計画からは除いています。

加藤会長 これは色々なところでよく議論になりますが、スポーツは文化ではないのかという議論が起きたときには、当然、スポーツも文化なので領域に入る。定義づければ文化の一つだと思いますが、それをどう振興するかについては、スポーツはスポーツで振興し、スポーツ以外の文化を別途振興しようというのが一般的です。両方とも文化と言えらると思いますが、振興の仕方は分けようということで、さいたま市においても同じ考えだということだろうと思います。

畑野委員　その上で、今、日本の自治体は、もちろん世界もそうかもしれませんが、財政が厳しくなると文化補助金を切る。よく話題になるのは、古典芸能に携わる方が首長に直談判をするということがある中で、色々な背景はあるでしょうけれども、新たな計画を立てて維持していこうという試みは一定の評価をしていいと思います。その中で、どうしても、税金の使い道という意味で数値目標が出てくると思います。数値目標はあっていいと思いますが、あまり縛られるのはなじまないのかなということが一つ。

それから、9ページの数値目標（2）で、観光分野との連携として経済の活性化ということもあるでしょうけれども、来訪者数のことが書いてあります。観光統計については、観光庁の方針が変わって、例えばアウトレットモールやショッピングセンターに行く人も来訪者に入れていいと変わると聞いています。そこら辺は、この場の議論にはなじまないと思いますので、そういった数字のマジックのようなものにはあまりとらわれないで考える必要があるのかなと思っています。

加藤会長　今のご指摘は、大変重要な点だと思います。目標を立てるのはいいけれども、それを数値目標にしたときに、そういう数値目標で本当に文化振興をきちんと反映できるのだろうかという疑問がまず一つありますね。

それから、いろいろな数値目標の立て方があって、もし立てるとしても、この目標の立て方がふさわしいかどうかは、もう少し検討すべき余地があるのではないかなということだろうと思いますので、私もそれは大きな流れでは全く同感です。つまり、数値目標そのものを立てることに、ある意味で無理があるのではないかな。例えば、先ほどのご説明の中で大変興味深い例を挙げられましたが、橋にデザインをしていくようにということは、どうやって数値目標を立てますかと言われても、橋の数全部についてどこまでデザインしたかをパーセンテージとして求めることはできるでしょうけれども、橋を一つ造るについても、そうした都市のデザインを考えたハードづくりをしていくという事柄は、理念としての目標にはなっても、それを数値であらわすことは大変難しいと思います。

近年で言うと、コミュニティデザインのような、コミュニティそのものをデザインしていく、法律や政策、施策など自体もデザインしていかなければならないということが言われている時代で、そういうところを一体どれだけ達成できたか数値であらわすことは非常に難しい。むしろ、数値目標が全くないとまた不安でしょうから、何かあったらいいと思いますが、ここに数値目標だけを目標として掲げるのは無理があると思います。この辺は、今後、皆さんにご議論いただいた上で、定性的な目標と数値目標の両方を併記するなり、あるいは、数値目標の取り方も少し工夫の余地があるだろうと思います。それは、逆に皆さんからいろいろご提案いただいご議論いただいて、あとで事務方のほうで色々整理していただこうかと思っています。

安島委員　根本的なことですが、市が文化の柱とする文化芸術資源について、ここの委員の皆様にもお聞きしたいのですが、盆栽はなさっていますか。どうですか、皆さん。

服部委員　していません。

中村委員　大宮盆栽美術館から近くに住んでいますけど、ご近所でも盆栽はしていなくて、盆栽を専業とされている方はいますが、一般でされている方はかなり年齢を召された方が多いようで、1鉢、2鉢、買っては枯らし、買っては枯らしという感じですね。

安島委員 鉄道はどうか。鉄道は文化ですか。

事務局 文化芸術都市創造条例では、鉄道も鉄道文化ということで位置づけています。

安島委員 条例があって、その条例にのっとってということでしょうけれども、鉄道や盆栽がさいたま市の魅力ある文化芸術資源として、それを柱に市民の新たな芸術の意識を高めていくというのは、僕からすると、芸術というものの捉え方が若干違うかなと思います。

それから、確かに、さいたま市の魅力あるものというのは、これは設問の仕方だと思います。市民意識調査にしても、記述させるだけではなく、項目が幾つかあってその中から選ぶということで、その中に、例えば人形が書いてあったり、鉄道博物館があったりすると、知っていると思って丸をつけていく。そうすると、その数値が上がっていく、市民の中でそれが認知されているものになっていくと思います。僕も大宮に生まれ育ちましたので、盆栽村があることは知っています。ただ、行ったこともなければ、盆栽を育てたこともないです。

前回の審議会があったときに、終わってから、非常にもどかしいというか、自分自身は、これで何ができるのだろうかという思いを強くしてこの前は帰りました。その後に、意見交換会が開催されるという通知をいただきまして、どんなことが話し合われるのかと思って傍聴してみました。そうしたら、この審議会とは全く別物というか、皆さん非常に白熱した議論が展開されていて、非常におもしろかったです。あまりにもおもしろかったので、第2回が去年の暮れにありまして、それも行ってみました。それも非常に興味深い話が展開されました。

その中でも、盆栽に対して、非常に良いものとおっしゃっている方もいれば、あれは単なる木だということを実際におっしゃっている方もいらっしゃいました。僕自身もそれに対しては非常に疑問があって、本日、ご出席の皆さんに伺って安心したのですが、この中で僕だけが盆栽をやっていないくて、皆さんがやっているのかと思ったのです。なので、盆栽は確かに認知されているのでしょうか、それが果たして、僕ら全員が推していくべきものかというところがありました。

実は、その他にもいろいろ疑問があったものですから、知人を介して、霞ヶ関まで行って、観光庁の国際観光政策課の課長さんに会ってきました。自分がさいたま市の審議委員になって、さいたま市は新しいことをしようと思っていて、さいたま市の魅力としては鉄道や盆栽などがあるとご説明しました。盆栽というのは果たして魅力のあるものとして推していけるのかどうか、コンテンツとして魅力あるものなのかということ聞いてみました。それに対して、国際観光政策課の方は、盆栽はすごい魅力だと言うのです。海外からお客様を呼ぶときに、盆栽はコンテンツとしては非常に魅力がある。でも、国の観光庁の国際観光政策課は、さいたま市に盆栽村があって盆栽美術館があることを知らないと言う。それが魅力あるコンテンツであれば、もっと広く、市民に知らしめるということよりも、なぜそういう窓口となるべき国の役人が知らないのか。そういうところにもっと働きかけるべきではないかと思いました。その方が言っていたのは、海外から人を呼ぶときには色々な手法があるけれども、コンベンションビューローというのは国際会議を誘致したりされるところですよ。そういうところが機能していないのではないかとおっしゃっていました。それが非常に成功しているのは、東京近郊で言うと横浜や幕張。横浜にはパシフィコ横浜があり、観光と国際会議をセットにして色々な人たちを呼んでいるそうです。さいたま市は、そのような活動が不十分ではないでしょうか。

中村委員 盆栽美術館の稼働率はどのくらいですか。どのくらい稼働しているのか、ときどき疑問に思います。外国の方は確かにいらっしゃいますけど、あそこにいらした方は、お昼をどこで食べたらいいか、ここからどこかへ移動するにはどうしたらいいか、わからないようです。そうすると、盆栽美術館だけを見て、お食事はどこがいいかと言うので、何軒か教えて差し上げます。そうすると、次には移動しない。

まちづくりというのは、そのものだけではなくて、いかにそこでお金を落とさせるか。せっかく市でつくるのだから、税収を上げる。この言い方はいやらしいかもしれませんが、結局は、市の経済が良くなるようにということで色々なものをつくるわけですから、うまく回れる道とか、盆栽村の近所は飲食店をここまでなら展開してもいいとかについて考えていく必要があります。あそこだと、お茶を飲むところもなくて本当に寂しい限りです。あれだけの盆栽を見た後に、余韻が楽しめるように、盆栽美術館の2階を喫茶店にしてはどうかという話を前回もしました。そういうことを考えていかないと、コンサートホールだけをつくっても、芸術劇場は市の管轄ではありませんが、あの周りにおしゃれなアクセサリ屋さんがあって、コンサートに行くのにイヤリングを忘れてもイヤリングが買えるとか。やはり、まちそのものに魅力がないといけないと思います。だから、盆栽美術館ができて、認知度が低いのだと思います。あそこを歩いたら、日本の伝統文化である盆栽を東京都から持ってきて、ここでがんばっていたのだなということがよくわかります。

加藤会長 今、お二人から大変貴重なご意見が出てきたので整理しますと、盆栽美術館ができて、それはそれで結構なことだと思いますが、そうした美術館、博物館、文化施設が建設されたときに、残念ながら、その運営に関してやや疑問点があり、もう少しポジティブな提案をしたいということだと思います。それは何かというと、施設を建てれば良いという問題ではなく、施設の中にも、お茶を飲むような場所くらいあってもいいのではないかと。もし、どうしても施設の中に設置できないのであれば、近隣のお店の情報をきちんと告知すべきではないか、あるいは、施設へのアクセス方法についてもきちんとお伝えすべきだろうし、そういう色々な面で、来場者に対する総合的なサービスというものが不十分ではないかというご指摘だと思います。

それはこれから少し考えなければいけないことですが、市としてもシャトルバスを運行など、色々工夫しておられますが、それがまだ十分に認知されていないのだと思います。何もしていないわけではないのですが、そのあたりの取り組みについての周知を含めて、もう少し、その施設そのものが、周辺を含めてアピールすべきだということです、今言われている点だろうと思います。

それから、盆栽、鉄道が、我がさいたま市が誇る文化かどうかということについてです。あるいは、誇る文化かもしれないけれども、それが果たして今後のさいたま市の文化芸術都市の創造に役に立つのかという疑問が安島委員から疑問が呈されたと思います。その部分で言うと、「さいたま市の文化芸術資源」と書いてあるところがみそで、これは微妙な書き方をしていると思います。「芸術文化資源」ではなく「文化芸術資源」と書いてあります。

実は、「文化芸術」という用語は、近年まで日本語にはありませんでした。「芸術文化」という用語はありました。でも、文化と芸術をそれぞれ分けた用語はありましたが、「文化芸術」という用語はつい最近、日本語として生まれました。私は、この用語については大反対しています。それはどこで生まれたかということ、この文書の4ページ「文化芸術の振興に関する基本的な方針」の中に、その基本的な方針が根拠としている平成13年に成立した文化芸術振興基本法というものです。このときに初めてこの用語ができました。これがこの用語を発明した法律です。このときに、これまではなかった日本語を使ったのは、必ずしも芸術文化だけではない幅広

い文化も含めた振興基本法をつくらうとしたため、本来で言うと「文化と芸術文化」あるいは「文化及び芸術」のようにしておけばよかったのですが、その両方を一気に言ってしまうために、いわゆる芸術の領域だけではなくて、もう少し幅広い文化の領域もカバーしたいがために「文化芸術」という用語を導入してしまったわけです。それでわかりにくくしている。

何を言いたいかというと、盆栽、鉄道は立派な文化です。それは文化ですが、必ずしも芸術ではないということです。したがって、盆栽と鉄道だけ振興したらいいかということ、それに疑問が湧くのは当然です。しかし、盆栽を振興したらその他の文化芸術をやらないと言っているわけではないので、そのあたりはむしろ提案していただいて、盆栽と鉄道以外にも、さいたま市に本来あるべき資源、もしくは、今のところは十分に資源になっていないのであれば、もっとこういうものを振興しようというご提案をいただければいいだろうと思います。

次に、果たして盆栽がさいたま市の都市の創造にとって役に立つかどうか。これは色々な意見があって当然です。今のところ、盆栽については市民の多くはやっていないわけですから、盆栽が振興の役に立つかどうかは疑問が出てくるわけです。しかし、盆栽は重要な資源ですね。例えば観光庁によると、それは国際的に大変評価されているので、振興の役に立つと言っておられることも事実です。残念ながら、我々日本人のほうが盆栽の価値を忘れていますが、海外では、実は盆栽は「BONSAI」という用語のまま使われています。そういう意味からしても、文化的価値からも、経済的価値からも振興の役に立つと思います。と思いますが、その進め方が十分に市民の理解を得られないで、海外で評価されているからということだけでは説得力を持たない。そのあたりの進め方については、また色々ご提案をいただきたい。そもそも市民が応援してくれないものをいくら海外に発信しても、それは無理だろうということになると思います。

もう一つは、なぜこんな疑問が発生してくるかということ、ここの数値目標ですが、市民が週に1回以上文化芸術活動に参加する参加率というときに、冒頭にも疑問が出されましたが、鑑賞者を言っているのか、主体的に参加する人のことを言っているのか、よくわからない。両方を含むというのが暫定的なご回答ですが、果たして、その両方が一緒にいいのかという疑問もあります。つまり、さいたま市として、鑑賞者を増やすことに価値があるのか、それとも、実際に活動する人を増やすことに価値があるのか。もちろん両方だと思いますが、どちらにどの程度のウエートをかけるのかということ、少し議論しておく必要があるのではないかと思います。

それを今までは議論せず、とにかく「参加者」と言ってきたところに無理があるのではないか。盆栽について言えば、参加者はゼロに近い。完全にゼロではないですが、ほとんどゼロに近くなると思います。鑑賞者もそれほど多くない。ところが、世界が関心を持っているから、何となく我々が関心を持っているような気になっているようなところもあって、そういう意味では、この辺の捉え方をきちんと整理する必要があるのではないかと思います。今、ご意見をいただいたことによって問題の所在がはっきりしてきたのではないかと思いますので、こうして点について、今後整理をしていただきたいと思います。

中村委員 安島さんは盆栽美術館には行かれましたか。

安島委員 行っていません。

中村委員 行ってない方がたくさんいらっしゃると思いますが、私は1回行きました。私は、別の委員会にも入っており、盆栽とか何かに携わる委員会にいたのですが、何



億円という盆栽を購入するという段階から、あまり賛成ではなかったのですが、結局は建設されましたので1回行きました。でも、あまりにも高価で、また、松が多く、私たちとはほど遠い、縁がない場所だなというイメージを持ちました。

でも、大宮盆栽村の近辺の学校かと思いますが、小学校で小さな盆栽を子供たちに育てさせています。盆栽なんて1日や2日でできるものではありませんから、たぶん1年位かけて教えるのだと思います。私の地元の小学校では、一輪で育てる菊を先生が育て、鑑賞させてもらったことがあります。こうしたこともやはり文化なのかなと思います。盆栽については、確かに、心が癒されるとか、色々な良い面があります。ですから、マンションでもこういう盆栽だったら育てられるということを一生涯懸命に宣伝していますが、指導する人も少ないし、市民もなかなか身近に考えられないということがあると思います。確かに盆栽はすごいということは聞いていますが、それがやはりさいたま市の市民に対してどれだけのメリットがあるかということだと思います。だから、もっと身近な盆栽というか、地域の中で盆栽を鑑賞や体験できる機会が必要であると思います。

安島委員      もっと目に触れていいと思うのです。

加藤会長      実は、目に触れているのですよ。ただ、気がつかないだけなのです。今、言われた身近な盆栽はいくらでもあります。その辺のそば屋さんに行ってもちょっと置いてあったりするのです。でも、我々はそれを盆栽と意識しないだけです。生け花も、盆栽も、ありとあらゆるところにあるけれども、あまり意識しない。

今、中村委員から大変良いご提案をいただいたのですか、身近な盆栽ということで子供たちに教えているというお話がありました。子供にとっても盆栽はなかなか楽しいものだと思います。少しずつ手入れをして、1年位かけて育てる。昔は、年をとったおじさんたちが何を始めるかということ、盆栽いじりを始めたものです。最近少し減っていますが。どちらにしても、これから、高齢者の生きがいつくりという面でも盆栽はすごく価値があると思います。

中村委員      清香園さんが女性向けの盆栽教室を開いていて、いつも満員です。お客様が来ると、さいたま市はあまり行くところがないので、盆栽村を歩くのですが、清香園さんは女性の方や若い方がたくさんいて驚きます。

加藤会長      そういう意味で、実は開発の余地があると思っています。その辺を、あまりにも盆栽だけに特化しようとするところにまた無理があつて、色々なものの一つ、メニューが10も20もあるうちの文化メニューの中の一つだろうと思います。それにしても、色々な経緯があつて、せっかくさいたまに盆栽村がある以上は、大いに活用していかなければならないと思います。今後は、その活用方法も含めて色々な提案をしていく余地があるのではないかと思います。

事務局      先ほど、安島委員さんの年間の来訪者数についてですが、平成20年が2,265万4,000人、平成21年が2,099万5,000人、平成22年が2,131万4,000人。おおむね横ばいと思われます。

もう1点は、服部委員さんから、盆栽美術館の入館者数についてのご質問がございましたが、平成22年の数字として6万5,563人、平成23年は5万335人で、1万5,000人ほど減っております。

加藤会長      平成23年度は震災の影響もあつただろうと思いますが、そのほか、一般的な博物

館系、美術館系の来場者の数から言うと、著しく高くはないと思いますが、著しく低くもないと思います。ただ、もう少し工夫の余地がきっとあるのだろうと思います。

それでは、後半のご説明をお願いします。

事務局 資料2「さいたま市文化芸術都市創造計画骨子（案）」の説明

加藤会長 ありがとうございます。後半の部分についてご意見をいただきたいのですが、その際に、前半部分で議論したのは、10ページ、11ページのところで言うと、③さいたま市の文化芸術資源の活用、④文化芸術の創造性を活かしたまちづくりの推進、そもそも資源を活かしてどうしようかという議論はあったのですが、後半では、①文化芸術活動の活性化や②文化芸術活動を支える環境の充実、そういうところについてぜひ意見を伺いたいと思います。現に、ここにいらっしゃる委員の皆様が取り組んでいるような活動をもう少し振興するにはどのようにしたら良いかというところを、せっかくですから、それぞれ委員の皆様からその辺を中心にご意見を頂ければと思います。

安島委員 新しい創造をするということで、既存のものを活かしていくことも必要だと思いますが、一つの大きな問題は11ページ④「文化芸術の創造性を活かしたまちづくり」ですね。さいたま市は、文化的なまち、芸術のまちとしてのイメージは決して高くはない。生まれ育った僕も、文化的なまちや芸術のまちというイメージは全くないわけです。住んでいる人もそういうイメージは持っていない。そうしたら、新たにつくるしかないのではないかと思います。ここで文化芸術をテーマにしたインパクトあるプロジェクトを展開し、新しい何かを発信していく。第1回目としてそれがあって、それを継続することによって、さいたま市が新たな芸術的なまちであるとみんなが言えるようになるということがあってもいいのではないかと思います。市民に広く発信し、それが新たな創造になっていくと思います。

前回の第2回意見交換会を傍聴していて、そのときに浜松の例が出ていたと思います。ピアノの国際コンクールがあって、その国際コンクールのことを言われていたので、その辺に注意しながら生活していましたが、無料のクラシック音楽情報誌『ぶらあぼ』に、浜松のピアノコンクールのガイドブックが、折り込みの付録としてありました。これを見ると、意見交換会でも言われていましたが、市の一つの課が通年でそれに携わっている。だから、主催は浜松市と文化振興財団で、協賛がANAやJAL、JR東海、ヤマハ、ローランドと続いているわけです。これを見ると、東京から会場まで行くためにはJR東海が絡んでいるのでパックでツアーになってくる。さらに、冊子の後ろの方には市内の飲食店がたくさん掲載されていてガイドブックのような機能もある。そうすると、どこで何を食べたらいいかという心配もない。これは一つの完結された大きなモデルケースだと思います。昨年が第8回ですから、歴史はまだ浅いわけです。でも、世界的にもこれだけ、去年は19カ国1地域から92名が参加しています。11人の審査員も日本人は3名のみで、あとは全部外国から招聘してくるわけです。このような大きな取り組みを行っている。

必ずしもコンクールを開くというわけではなくて、このようなことをさいたま市が行う意味がどこにあるか。その意味づけだと思います。こうしたものを第1回として何か開催し、それを継続することによって、文化・芸術的なまちと思えるようになるのではないかと漠然と考えました。

加藤会長 大変いいご提案ですね。今、他市の事例として浜松市の事例を出していただきま

したが、浜松は明らかに音楽都市を目指すことを鮮明に打ち出していて、それはヤマハやカワイなどが地場産業としてあったことが大きな要素になるのでしょうか。だから、半ば資源を生かしつつ、何か新しい世界をつくろうというわけですから、そういう意味で、ピアノの国際コンクールを設定して開催していこうというわけです。

今、必ずしもコンクールでなくてもよいというお話でしたし、「国際」がどこまでいけるかわからないけれども、何らかの文化芸術の新規プロジェクトがないと、それは到底、都市の創造にはつながらないので、それは何らかの形で検討すべきものだろうと思います。これは非常によいご提案をいただいたので、そういうことを参考にしつつ、しかし、さいたま市らしい特色が出せるものは一体何なのだろうかということを検討していく必要があるかと思っています。

稲田委員 12ページに、色々なものの振興ということがありますがけれども、鉄道文化の振興と言われても、あれはJRの持ち物なので、さいたま市として、ああしろ、こうしろということとはなかなか口を挟む余地はないのではないかと思います。

例えば、漫画文化の振興についてですが、さいたま市と漫画はどういう関係があるのか。漫画会館でしたか、私は行ったことがないのですが、漫画発祥の地ということになっているのですか。他の人に聞いても、皆さんもほとんど知らないですよ。例えば「鉄腕アトム」、「サザエさん」、「ゲゲゲの鬼太郎」のようなインパクトは全然なくて、みんなが知らない、「なぜ漫画なのか」という人が多いわけです。

例えば、清里に芸術村がありまして、若い絵描きさんを集めたアトリエがたくさんあって、そこで育てている。そこから一流の画家が出たかどうかは知りませんが、例えば漫画文化というならば、漫画会館のあたりに漫画界を目指す若い人を集めて、何らかの支援をして育てて、そこで、例えばコンクールなら漫画コンクールを開催するということもありかなと思いました。

加藤会長 それも大変建設的なご指摘だと思いますが、残念ながら、楽天は大変貴重な人だけれど、正直言って、今はほとんどの人に関心を持たれていないことも事実です。もちろん、顕彰することも大事ですが、それはあくまできっかけとして、新しい漫画文化をつくるほうが重要でしょう。もし、そうだとしたら、相当力を入れて取り組まないと難しいと思います。

これも他市の事例ですが、京都は、京都精華大学に漫画のコースをきちんと設けていますし、漫画の博物館も建てました。それは、全部新しいものを世に送り出すための仕組みとしてつくっているわけで、過去の資源を集めていくことも大事ですが、常にそこから新しい漫画家を発掘していったって育てていく、そういう観点を今後は持たないと、漫画文化の振興という観点から言うと難しいことは事実です。逆に言うと、それをさいたま市として一つの柱に据えることに意味があるとなれば、ぜひそれを推進していけば良いのですが、これは結構大変ですね。さっきの、国際的な何らかの新しいプロジェクトを考える中にも漫画を入れて、あるいは、ジャンルを越えてつくるという方法は、日本でもあまり実施していない。実は、各自治体において色々なことを大体はしています。音楽については、国際的フェスティバルを開催している都市は多くありますし、美術についても国際的な都市があるし、映画も開催している。漫画も全くないわけではないけれども、漫画あたりも含めていろいろなプロジェクトが全国で行われている中で、さいたまはどうするかというと、その辺は相当の工夫が必要ではないかと思っています。でも、大変良いご意見をいただいたと思います。

畑野委員 細かい話で恐縮ですが、漫画に関して言うと、漫画会館については、私は行ってみて感激しました。たまたま行ったときに、別にさいたまにゆかりがあるわけではないのですが、全国紙の新聞にコマ漫画で政治を風刺するようなものがあり、その展示会をやっていました。最近の政治について、下手な記事や報道を見ているよりもなるほどねと思い、それがきっかけで漫画会館に行くようになったということがあります。

それと、さいたまに関係はないのですが、ご存じの方も多と思いますけれども、今、子供たちには「ワンピース」という漫画が大変人気があります。初めはバカにしていたのですが、実は大人も読んでいたことがわかりました。真面目に「私の人生は変わりました」と言う大人もいて、私は読んでみてもわかりませんでした。私はもう時代遅れというか、時代が変わってきているのだろうなと感じました。仮に、さいたまとはゆかりがなくても、漫画でやっていこう、予算をかけていこうということであれば、昔のトキワ荘のような、あるいは、漫画家のコンクールを開いて、そこで優勝した人にさいたまの漫画を書いて全国に発信してもらおうとか、もし乗り出すのであれば、そういうこともあり得るのかなと思っています。

加藤会長 今、全国的に最も評価されている文化の一つは漫画です。しかも、国際的にも日本の漫画は評価されている。評価されているけれども、きちんとそうしたものを国策として発信しようとしないので、逆に、韓国は、漫画は韓国から起きたと主張しています。そういう意味でも、文化の発信の仕方として、韓国は国家戦略、都市戦略として文化を世界に発信しているわけですが、日本の場合は、国家戦略ではアニメなどのメディア芸術に関する国立の施設をつくらうとしたら、当時の首相が、国立漫画喫茶をつくってどうすると言われてつぶされた経緯があるくらい、国の戦略としての発信に関心がない国なので、せめて都市として、国際的に色々な文化を発信していこうということは、ぜひ実施していただかなければいけないので、そういう意味では、漫画は一つの大きな可能性を持っているので、検討する余地は十分にあると思います。

ただ、そのやり方は、実は日本中どこも狙っている話なので、その中でさいたま市が突出するには、相当の覚悟が要るし、色々手法を考えなければならないと思いますが、そのあたりはぜひ検討していただきたいと思います。

中村委員 確かに、今、子供たちには漫画がすごく浸透していますね。昔、私たちが育ったところは、漫画は見てはだめだと言われていましたからね。

私の姪が漫画家で、自分の出身校の高等学校をモデルにした野球漫画を描いています。今、だいぶ活躍してまして、高校の生徒募集の1ページを描いたり、講演に行ったりしています。

私も読ませてもらい、私にはわかりませんでした。小学生の子供には伝わるわけです。だから、やはり漫画の文化も素晴らしいのだろうと思っています。今の若いお母さん方は、漫画に対する感じ方も違うのだと思います。

加藤会長 そういう意味では、先ほど私は、盆栽は文化ではあるが芸術ではないと断言してしまいましたが、それは修正したいと思います。漫画も同じことで、文化であるが芸術ではないという意見があれば、漫画も立派な芸術だという意見もあるので、盆栽もたぶん同じことだと思います。芸術だという意見も当然あるので、それはそれぞれの時代によって何を芸術と言い、何を芸術と言わないか、あるいは、何を文化と言い、何を文化と言わないか、それはまた変化してくると思うので、そういう意味では、少なくともきっかけはあるし、今、中村委員から、現代の漫画家のご紹

介もいただいたので、そういう人材についても考慮しながら、検討するといいいのかなと思いました。ありがとうございました。

事務局

先ほど、漫画についてコンクールはどうかというお話がありましたが、漫画会館で、毎年、一コマ漫画のコンクールを開催しております。PRが足りなくて恐縮ですが、ご紹介させていただきます。

また、先ほど畑野委員もおっしゃったとおり、漫画会館では企画展を年に数回開催していきまして、今年度は、石ノ森章太郎さんの企画展を開催したところ、多くの石ノ森ファンが来館いたしました。ですから、漫画会館が何もしていないということではなくて、漫画会館なりに活動しております。

稲田委員

音楽についてあまり話が出なかったものですから、ここでちょっと発言したいと思います。

先ほどの発言の中に、前回の意見交換会の中で、山口委員が浜松のピアノコンクールの話をされていましたが、同時に、合唱の話もしていました。

旧浦和の話ですが、私は昭和31年に大学を卒業して初めて浦和の木崎小学校に就職しました。北浦和の駅から学校まで行く途中に、ピアノの音が頻繁に聞こえてきました。私が育ったのは熊谷でしたが、熊谷ではそのような環境はありませんでした。当時、昭和31年頃は、ピアノがある家なんて、1つの村に1台のアップライトピアノがあればいいほうでした。北浦和から学校まで歩く間に何軒もピアノの音が聞こえてきて、これには本当に驚きました。やはり浦和市はすごいなと思いました。

その当時の新聞だったか雑誌だったかは忘れましたが、北浦和はピアノの台数が、まちとしては全国で最高の保有台数があるという記事を読みました。さすがに、浦和は音楽的な文化が非常に高いと思いました。当時、何人もの人が東京芸術大学を卒業されて、まちなかで子供にピアノの指導をしている。全世界に誇れるレベルの高さの指導をされていたわけです。当時、音楽大学を卒業する人は数も少なかったですし、倍率も高くて、普通の勉強ではなかなか入れない東京芸術大学を卒業された方が、旧浦和にはたくさんいたわけです。

その後、私は、芸大を出てから教員になって、浦和第一女子高校の教諭を10年間務めました。そのときの合唱の話をする、僕は10年間、合唱コンクールに参加しましたが、県大会があって、関東大会があって、全国大会に出られるという状況でした。当時、関東から全国へ出られるのは1校だけでした。私は、関東大会に10年間出て、そのうち8回は1位を取りました。当時、1つの学校がある地域で8回も優勝するなんていうことは、全国を見てもほとんどありませんでした。全国大会でもある程度の成果を上げてきたので、新聞で報告があって、大変高く評価されて、知らない人がいないくらいにこの地域では広まっていました。現在も、私の後を継いでいる人たちがかなりがんばっています。

音楽や美術などの芸術を育てるには、何としても指導者の地位を上げる必要があります。一般に、合唱などは、素人の方は20~30人が集まって合唱活動をしています。私が今持っている浦和の会は55団体、大宮でも同じくらいのレベルでがんばっています。そのもとは、旧浦和市で、文化団体連合会をつくらうということが昭和42年に起こりまして、43年に文化団体連合会を結成しました。そのときに市はどうしたかということ、全部で12の団体を文化団体として市が認めて、その団体全部に、最初は年間350万円から始まって、それが年ごとに50万円ずつくらい上がって、最後の8年間には600万円の費用をその12団体に交付しました。ですから、浦和市では教育に予算をかけたわけです。これが、4市が合併してから、数字では申し上げませんが、徹々たるものになってきています。今、僕は文化団体の会長、理事長を

務めています、その予算は本当に微々たるものです。4市が合併したのだから、浦和市が600万円も出していたので4市で2,000万円くらいの金額になっても不思議ではない。ところが、逆に、さいたま市の文化協会の予算金額は何分の幾らかになりました。それがどこに配分されているのか、不思議でならないです。

今日はここまで言うつもりはなかったのですが、文化に対する予算が非常に少ないと思いますので、文化予算をもう少し上げないことには、名目だけでは発展しません。よろしくお願いします。

加藤会長　　今の稲田委員のご意見を踏まえた上でご検討いただきたいと思います。  
もう少し色々ご議論いただきたいのですが、予定時間が過ぎてしまいましたので、この辺で本日の議論は終了とさせていただきたいと思います。  
議長の仕事はここまでとさせていただいて、あとは事務局にお返しします。

事務局　　加藤会長、どうもありがとうございました。また、委員の皆様におかれましても、長時間にわたりご協力いただき、どうもありがとうございました。